

第一章

「アンコール！ アンコール！」

二度のアンコールを終えたにもかかわらず、今だ鳴り止まないアンコールの声と手拍子。それに応えてメンバーたちが舞台へ戻ると、悲鳴じみた歓声が観客席から上がった。

「アンコールありがと！ みんな、大好きだよ！」

極彩色のスポットライトに照らされて、スモーキーピンクの髪の毛と同じ色のロングジヤケットをまとった奏くんが、観客席に向かって投げキッスをする。

奏くんの名前が大きく書かれたファンサうちわを持った女の子たちが、絶叫に近い歓声を上げた。

「奏♡ 愛してる♡」

「一生推していくから！」

奏くんが呼びかけに応えるように彼女たちを見つめ、薄茶色の、こぼれそうなくらいに大きな瞳を細めて微笑みかける。

「神ファンサきたー！」

会場を揺らすほどの大きなどよめきに包まれる。

「今度こそ最後の曲です。聴いて下さい。『夜空のオペラ』」

しっとりとした伴奏くんが流れ、三人の歌声がドーム中に響く。

観客席のファンたちは、目線ひとつも見逃すまいと息を吞んで彼らを見守っている。

「♪」

奏くんのソロパートに合わせて統率が取れたリズムで揺れる桃色のペンライトは、まるで深海の中で揺らめく光のようだ。

センターで歌う奏くんに合わせて、左右に立つカイトくとハルくんのハモリも完璧に決まっている。

これまでで一番良い仕上がり。ドームツアーのラストの相應しい。

「ありがとう！ また会おうね！」

歌い終え、手を振りながらステージの袖へ消えていくメンバーたち。会場中から大きな拍手が巻き起こる。

アイドルグループ【Emo^エRa^モni^ラca^{ニカ}】の初ドームライブは大成功に終わった。

「みんな、お疲れ様！ 今まで最高のパフォーマンスだったよ」

戻ってきたメンバーを出迎え、彼らに冷感タオルと、よく冷やしたスポーツドリンクのペットボトルを手渡す。

「マネージャー、ありがとう」

「いや、緊張した！ やっぱドームは全然違うね」

カイトくんとハルくんがペットボトルを受け取り、蓋を開けて一気飲み干す。

「奏くんもお疲れ様。ほら、まずは水分補給して」

と、奏くんにペットボトルを渡そうとすると、

「マネージャー、オレもう限界〜！ 疲れたよ〜！」

半べそをかきながら、私に覆いかぶさるように抱きついてきた。

「歌詞間違えるし、ステップ踏み損なうし、もう最悪！」

「大丈夫だよ、ちゃんとカバーできてたじゃない」

「ほんとに？ オレ、ちゃんとできてた？」

「すっごく素敵なステージだったよ！ 今まで見た中で一番の仕上がり。ファンサもバツチリだった」

「オレ、メロかった？」

「うんうん、すごくメロかった」

「うれし〜！ よかった〜！」

ようやく安心したのか、奏くんは私の肩にぐりぐりと頭を擦りつけてきた。

「安心したら、喉乾いちやった。マネージャー、水飲ませて〜」

「はいはい、ちょっと待ってね」

ペットボトルの蓋を開け、奏くんの唇へ持つていくと、まるでミルクを飲む赤ちゃんのようにこくこくと喉を鳴らして、スポーツドリンクを飲み干していく。

その間に私は冷感タオルで、首筋や額を伝う汗を拭き取っていく。

「ねえ、お腹もすいた。なんか食べ物持つてる？」

「奏くんが好きな、チョコバナナ味のプロテインバーがあるよ」

袋を開けてプロテインバーを取り出すと、奏くんが口をあーんと開けた。

「疲れて食べられない。マネージャー食べさせて」

「はいはい」

プロテインバーを口まで持つていくと、パクつと奏くんが食いついて、あつという間にぺろりと食べてしまう。

「マネージャー、おかわり」

「もうこれだけしか持つてないんだ、ごめんね。着替えの時間もあるし、そろそろ控え室に戻ろうよ」

「えゝめんどうかいなあ。マネージャー着替えさせて」

私にじゃれつく奏くんを、他のメンバーふたりは苦笑いで見守っている。

「ほんと、奏は赤ちゃんみたいだな」

「マネージャーもよく世話を焼くよね。大変でしょ」

「あはは……これが私の仕事だし」

「だって、オレマネージャーがいないと生きていけないし」

奏くんがにへらつと笑う。ステージでの爽やかな王子様のような微笑みと違って、弛緩しきつた蕩けそうな笑み。

（こんな顔、ファンには絶対見せられないな……）

「奏が言うとかちに聞こえるから怖いな」

と、チーフマネージャーが合の手を入れてくる。

「だって、一生面倒みてくれるって言ったもん。ねーマネージャー？」

「あはは……奏くんがずっと【EmoRanica】のセンターやつてくれるならね」

「やるやるうだからオレのお世話係よろしく♡」

「はいはい」

すりすり猫みたい私へ顔を擦りつける奏くんの頭を撫でて、私はうなずいた。

「今日は本当にお疲れ様。明日オフだからゆっくり休んでね」

マンションの地下駐車場に車を止め、ドアを開ける。

「お疲れさま」

カイトくんとハルくんが軽く会釈をし、それぞれの部屋に戻っていく。

ライブが終わった後、同じマンションに住む彼らを車で送り届けるのもマネージャーである私の仕事だ。

「ほら、奏くんも降りて」

後部座席の背もたれに身体を預け、ぐーぐーいびきをかいている奏くんの肩を揺する。

「うーん……まだ眠いんだけど」

「部屋に戻ったら、好きなだけ眠れるから」

「マネージャー、おろして」

奏くんが後部座席に寝そべって、私に向かって手を広げた。

「はいはい、しょうがないな」

奏くんの背中に手を回し、抱き起こして立ち上がらせる。

手早く車の施錠を済ませると、まだフラフラしている彼の手を引き、エレベーターへと向かった。

カードキーで奏くんの部屋の鍵を開け、手をつないだまま一緒に部屋へ入る。

電気をつけると、テーブルの上にゼリー飲料のパウチやプロテインバーの袋が積み上がっているのが

視界の端に映る。

（これ、いつのゴミなんだろう……）

奏くんは、放っておくところに食べない。オフの日くらいは何か作って食べさせたい。（ツアー行つてたから洗濯物は出して溜まってる……明日はご飯作りと掃除かな。それと切れてるモノをチェックしてリストアップして買いだし……そうだ、まずはゴミを片付けないと）

なんて頭の中で考えを巡らせていると、背後から奏くんが私の腰に手を回してぎゅーつと抱きついてきた。

「ちょ、ちよつと奏くん。だめだよ。まずはゴミを片付けないと」

「そんなの後でいいじゃん。オレ、マネージャーとチャイチャしたい。だめ？」
上目遣いでウルウルされると、断れなくなってしまう。

「……ちよつとだけだよ」

「ありがと！ マネージャー、大好き」

満面の笑みで私を見上げる奏くん。

この笑顔にはほんと弱い。

何でもしてあげたくなっちゃう。

（一目惚れ、だったんだろうな）

奏くんは、私がスカウトしたアイドルだ。

新規アイドルプロジェクトのメンバーを探している最中。

道を歩いていたら彼に、一目で惹きつけられた。

アーモンド型の大きな薄茶色の瞳に、すつと通った鼻筋。可憐さを感じさせる薄い唇。ミルク色のきめ細かい肌。髪の毛はピンクベージュという奇抜な色にもかかわらず、地毛のように馴染んでいて。だぼつとした白いロングトレナーとヴィンテージであろう、少しくたびれたストレートのジーパンというシンプルなお出で立ちは、華奢な彼の身体をよく引き立てていて。

中性的な彼のルックスは、どれをとっても完璧に見えた。

何より彼の周りをきらめく七色の光が取り巻いているように見えたのだ。

「アイドルに、興味ありませんか？」

気がついたら彼に駆け寄り、そう声をかけていた。

「……アイドル？」

「あ、すいません。私、こういうものでして」

慌てて名刺を渡すと、彼は上目遣いで小首をかしげた。

「キミが、マネージャーやってくれるの？」

「はい。所属は決まれば、おそらくは」

「ふーん……」

奏くんは、しばらく名刺をじつと見つめて考え込んだあと、ふっと顔を上げて私を見た。

「いいよ。アイドルやつても」

「本当ですか!？」

「キミが、一生面倒見てくれるならね」

「もちろんです！一緒に頑張りますよね！」

それから【Emo R a n i c a】が結成され、わずか二年で全国ドームツアーまでたり着いた。

飛ぶ鳥を落とす勢いでヒットを飛ばし、歌以外にもCMにバラエティにドラマにと大活躍。

『国民的アイドル』と呼んでも差し支えないだろう。

奏くんは飲み込みが早く、歌もダンスも素人だったにもかかわらず、レッスンを受けるうちにメキメキと上達していった。

センターの座を獲得した彼の人気は、デビュー後うなぎのぼり。今や奏くんがグループを牽引していると言っても過言ではない。

……ただ、生活は完全に終わってるけど。

奏くんはびっくりするくらい何も出来なかった。

今までどうやって暮らしていたのか不思議なくらいに。

朝は起きられないので必ず私がモーニングコールをし、部屋まで迎えに行っている。寝ぼけている彼の身支度を整え、必要な荷物をまとめて部屋から連れ出す。

仕事が終わったら彼の部屋を片付け、溜まった洗濯物を洗ったり食事の手配をしたり。

「食べるのめんどくさい」とむずかる彼にご飯を食べさせることもある。

お風呂に入れてあげて寝かしつけまでやってようやく私の仕事は終了といった感じだ。

さすがにそこまでやっていると思うていないみたいだけれど、収録やライブの合間にかいがいしく奏くんの世話を焼いている私の様子を見て「もはや育児か介護だね」なんて苦笑されることもよくある。

さすがに私に負担がかかりすぎではないかと心配してくれる人もいたのだが、「マネージャーがいないとオレは生きていけないから」と奏くんが公言しているので、それで上手く回っているならと黙認されている状態だ。

チーフマネージャーには「大変な役目を押し付けてしまって、申し訳ないね」なんて言われてしまったけれど、全く苦にはならない。むしろ奏くんに必要なされていることを幸せだと思っている。

奏くんの為なら、私は何だってする。

私が見つけた、唯一無二のスーパースターなんだから。

「ねゝひぎまくらして」

奏くんが私の首筋に頬を寄せ、猫なで声で言う。

「いいよ。はい、どうぞ」

座ってポンポンと膝を叩くと。奏くんはいそいそと寝転がり、私の膝に頭を載せた。

「はあくやつぱりマネージャーといると落ち着く」

「ふふ、良かった。今日はがんばったもんね。本当にお疲れ様」

「マネージャーが見守ってくれたから、オレ、頑張れたんだよ」

私の膝に頬を寄せて、奏くんが呟く。

収録やライブが終わる度に、彼はそう言って私に感謝をしてくれる。

もうその一言だけで、疲れなんて全部吹っ飛んでしまう。

「よく、あんなワガママにつきあえるよね」

なんて、事務所の人やテレビ局のスタッフに影で言われたことも少なくない。

「いいように使われてるだけじゃない？」

なんて言ってくる人もいた。

きつと奏くんにとって、私はなんでもしてくれる都合がいい存在なのだろう。

でも、それでいい。

奏くんはきらきら光る私のスーパースター。

私は、彼が輝けるならなんだってする。

自分なんてどうなっただって構わない。

「マネージャー大好き。ずっと一緒にいてね」

奏くんが私を見上げて、ふにやつと微笑む。

「うん、ずっとそばにいるよ」

額にかかった柔らかな前髪をそつとかきあげると、奏くんは嬉しそうに目を細める。

「ねえ、おやすみのキスしてよ」

奏くんが、自分の頬を指さす。

「うん。おやすみ」

身を屈めて彼の頬にくちづけると、「えへへ」と満ち足りた顔で私のお腹に顔を埋め、すうすうと寝息をたてはじめた。

「……無邪気な顔しちゃって」

ふふ、と笑みがこぼれる。

お腹にかかる、彼の可愛い吐息。

膝に感じる、彼の頭の重み。

二人きりの世界で彼の全てを堪能出来るなんて、これ以上の幸福なんてない。利用されているようなんだっていい。

これは私にだけ許されている特権なのだから。

ドームツアーから数週間が過ぎた頃。

「君、ちよつといいかな？」

事務所へ出社すると、すぐに社長に声をかけられた。

「……はい？」

「話があるんだ、今から一緒に来てくれないか？」

（な、なんだろう……）

もしかして、何かやらかしてしまっただろうか？

ドキドキしながら社長の後をついていく。

会議室に入ると、パイプ椅子に細身のスーツを身につけた男性が腰掛けていた。黒髪を横に流し、メタルフレームの眼鏡をかけていて、いかにも真面目そうな雰囲気だ。

彼は私たちの姿を認めると、すつと立ち上がった。

「実は、今【Emorancia】を担当しているチーフを、今度デビューするグループのマネジメントに専念させようと思つてね。代わりに、彼にチーフマネージャーを務めてもらうことになったんだ」

「高藤友貴たかとうともきです。 よろしくお願ひします」

「よ……よろしくお願ひします」

慌てて頭をぺこりと下げる。

「高藤くんは、前職ではあの『8男子』をマネージメントした凄腕のマネージャーなんだよ」

「トップアイドルになったのは、彼らの実力あつてこそ。私はただ、少し力添えをしただけです」

高藤さんはニコリとせず静かに言う。

威圧的でもなんでもない。むしろ穏やかな雰囲気の人だと思う。

けれど、こうやって向かい合っているだけで気圧されてしまう。眼鏡の奥の目つきは一見穏やかそうだけれど鋭く光っていて、些細な綻びも見逃すまいと私を観察しているようだ。

今まで一緒に仕事していたチーフマネージャーが明るくてざつくばらんな雰囲気の人だったので、温度差が激すぎて戸惑うというか。

「じゃ、そういうことなんで。あとはふたりでよろしく頼むよ」

社長はそれだけ言うと、さっさと会議室を出て行ってしまった。

（ええええ……）

呆然としている私へ、高藤さんが申し訳なさそうに声をかける。

「すみません、私がすぐにミーティングをお願いしたので、社長は気を遣ってくださいったんだと思います」

「あ……そうなんですね」

「はい。まずは座りましょうか」

おずおずと高藤さんの向かい側へ腰かけると、彼はすぐにビジネスバックからノートパソコンを取り出し、なめらかな手つきでキーボードを打ち始めた。

「あなたのお話は社長から伺いました。センターの皆月奏さんみなつきかなでをスカウトして見出したのはあなただとか。【EmoRanica】のブレイクはあなたの功績だと社長が絶賛していましたよ」

「そんな……。ヒットは彼ら自身を持つ魅力とたゆまぬ努力のたまものです」

「ご謙遜を。いくらタレントたちに、才能があっても、マネジメントする側に引き出す力がなければ、彼らは埋もれていつてしまいます。あなたは、かなり献身的に彼のケアをしているそうですね。自分の生活を顧みない位に」

「あ……奏く……皆月にはアイドル活動に専念してもらいたいで、私がフォローしている部分もあります」

「なるほど。確かに、彼は天賦の才能がある。ですが生活能力にかなり問題があるため、

あなたがそれを補っている——と前任のチーフからも引き継ぎの際に伺いました」

「そつ、そうなんです。皆月は私のフォローがないと活動にも支障が出てしまうので……」

「

「ええ、事情も存じておりますよ」

流れるようにキーボードを叩く音がピタリと止み、高藤さんが顔を上げた。

「ですが、これからはそのようなことは、やめていただきたい」

「え……？」

頭の中が真っ白になった。まさかそんなこと言われるなんて。だって、奏くんはひとりじゃ何もできないのに。

「でつ、でも……私がフォローをやめたら、皆月は……」

「あなたが一生、そばにいるわけにはいかないでしょう。彼のためにも、自立が必要で

す」

「……っ！」

核心を突かれて、何も言えなくなってしまった。

全くもって正論だ。そんなの初めから分かっている。でも、気づかないふりをしていた。だってそれがなくなってしまうたら、私と彼をつなぐ細い糸はぷつり切れてしまうから。

「このままではいつか彼はダメになつてしまう。今は若くて人気もあるから、周りも許容してくれるかもしれませんが。それに慣れてしまつたら、芸能人としての寿命はおそらく縮まつてしまふでしょう。私は、彼には更に飛躍してもらいたい。だからこそ、今手を打つておく必要があるんです」

熱心に語る高藤さんのよく動く口を、ぼんやりと眺める。
ずっと奏くんのそばにいたい。でもそれは私のエゴだ。奏くんに依存されて内心喜んでいた。

でもそれが、彼の才能を潰す原因になつていたとしたら……？

（本当に奏くんのことを考えるなら……やっぱりこのままじゃいけないのかもしれない）
「……突き放すのは辛いかもしれませんが、本人のためです。了承していただけますかね？」

念を押すように、私の頭上へ高藤さんの声がかぶさってくる。

彼は奏くんの未来を、真剣に考えてくれている。ならば従うべきだろう。

これは、奏くんのためなんだ。

「……はい」

私は膝の上で両手を握り締めて、弱々しくうなずいた。

第二章

——それから、数日が経った。

「ねーマネージャー、最近何か変じゃない？」

バラエティ番組の収録を終えて私のところに戻ってきた途端、奏くんが不満をぶつけてきた。

「そ……そうかな？」

「そうだよ。だって休憩時間とか、ずっと他の人と話してるし！ 送迎のあとはさっさと帰っちゃうし！ なんかオレのこと避けてない？」

「この間から新しい現場だから、挨拶回りとか打ち合わせとかで忙しくて。寂しい思いさせちゃってたらごめんね」

「寂しいより！ ずっとオレのこと見てくれなきゃヤダ！」

奏くんがぷうつと頬を膨らませる。

「……ほんとにごめんね。【EmoRanica】はこれからたくさん展開があるから、ちよつとバタバタしてて……」

「じゃあ帰ったら、今日はずっとオレと一緒にいて。仕事の後ならできるでしょ？」

「……それは……」

言いよどむ私に、奏くんが詰め寄る。

「ねえ、やっぱり今日のマネージャーおかしいよ。いつもなら、『はいはい』ってすぐに言ってくれるじゃん。何かあったんじゃないの？」

「……」

「答えられないようなことなの？　ねえ、はつきり言いなつて」

奏くんを宥めようとハルちゃんとカイトくんが「落ち着けつて」と肩を叩くが、奏くんは顔をしかめて手を振り払う。

「どうなの？　マネージャー」

「……えつと……その……」

言いよどむ私の背後から、高藤さんがヌツと顔を出した。

「スタジオ内で言い争うのは感心しませんね。誰が見てるかわからないのですから、もつと自覚を持ってください」

「……誰だよ、キミ」

奏くんがぎろり、と高藤さんをにらみつける。

「申し遅れました。私は新しくチーフマネージャーに就任した高藤と申します。よろしくお願ひします」

高藤さんが丁寧な頭を下げる。奏くんはふいつと顔をそむけてぶっきらぼうに言った。

「あつそ。どうでもいいけど。オレたちの問題に口出さないでくれる？」

「そうはいきません。私はチーフマネージャーとしてあなた方の管理を行っています。アイドルとして不適切な行動は見過ごせません」

「……は？」

奏くんのこめかみに青筋がビキビキと浮かぶ。まずい。奏くんはこういうお説教が大嫌いなのに。

「オレ、ちゃんと仕事してるんですけど？」

「ええ。ですがアイドルというのは、いついかなる時でも人に見られていることを意識しなくてはなりません。あなたは特に国民的アイドルとも呼べるくらいの立場にいる。もつと節度を持った行動を取るべきだ」

「あのさ、オレバカだからもつとはつきり言ってくれる？」

明らかに苛立っている奏くんと高藤さんの間に、慌てて割って入る。

「すみません！ あいつ、彼には私からちゃんと話をしますから……！」

毛を逆立てた猫のような形相でにらみ付けてい奏くんを一瞥し、高藤さんが小さくため息をついた。

「……そのほうがよさそうですね。今日最後の現場ですし、カイトくんさんとハルくんさんは、私が送り届けます。二人でよく話し合つて、明日報告してください」

「はい。申し訳ありません」

「では、お疲れ様です」

心配そうにちらちらと様子を伺うカイトくとハルくんに「大丈夫だから」と口を動かして伝える。

「……控え室で、話そっか」

まだ高藤さんの背中をにらみ付けている奏くんの肩をぽんぽんと叩くと、彼は不満そうに唇を尖らせながらもうなずいた。

控え室に戻っても、奏くんは不機嫌さを露わにしたままだった。

椅子に座って落ち着きなく足を揺らす彼に、なんと切りだそうかと考えていると、

「……あのクソ眼鏡、ムカつく。前のチーフはそんなこと言わなかったのに」

奏くんは吐き捨てるように言うと、甘えるように上目遣いで立っている私を見上げる。

「あーイライラする。ねえマネージャー、頭なでなでしてよ」

「……」

頭を差し出してくる奏くんに手を伸ばしかけて、引っ込める。

今までだったら、迷いなく頭を撫でて、抱き寄せて、大丈夫だよって言ってあげられるのに。

「……どうしたの？　してくれないの？」

「……………」

「なんで？　これくらいいいじゃん。ねえ、ホントにどうしたんだよ？」

立ち上がった私の腕を引く奏くんの手を、そつと振り払う。

「奏くん……あのね。もう、今まで通りにはできなくなっちゃったんだ」

「……なにそれ。どういう意味？」

「えつと……もう、奏くんのお世話はできないってこと。今までべつたりすぎたから、将来のことを考えると自立しないといけないんじゃないかなって、思つて……」

奏くんの顔から、みるみるうちに表情が消えていく。

「意味わかんないんだけど。ずつとそばにいてくれるって言つたじゃん」

「……マネージャーとしては、そばにいるよ。だから……」

「そんな話はしてない！」

悲鳴じみた叫び声をあげて、奏くんが私につかみかかった。

「今までさんざん甘やかashiいて、何が自立しろだよ！　ふざけんなよ！　だつたらはじ

めからオレの面倒なんか見なきゃ良かったんだ！」

奏くんはぼろぼろと大粒の涙を流してしゃくりあげる。

こんな悲痛に満ちた顔なんて見たくなかった。

彼を悲しませたくなんて、ないのに。

いつも笑っていてほしいのに――

「ごめん……ごめんね……」

「……あいつに、言われたんだろ？ あの高藤とかいうクソ眼鏡。ブツ殺してやる」

「やめて。高藤さんは関係ないよ。私が決めたことだから……」

「なら、ますます許せない。キミがいるから、オレはアイドルやるって決めたのに。全部、キミのために頑張ってきたのに。今さらオレを捨てるとか、無責任すぎるだろ」

ガッ！

奏くんが私の頭を両手で鷲づかみにする。

「かな……で……く……」

彼の顔は、ひどく歪んでいて。

キラキラ輝いていた瞳には、怒りと憎悪と――私へのどす黒い愛情が渦巻いていて。ぐちゃぐちゃでいびつで、でも、うっとりするくらい美しい。

（こんな顔……初めて見た）

「――キミがオレから離れるつもりなら、アイドルなんか辞めてやる」

「……っ！」

顔をぶつけるようにして、奏くんが私の唇に自分の唇を押しつける。

「……っ！ やめ……て……っ！」

「イヤだ。やめない。どうしてもやめてほしいなら、オレ、マジで引退するからね？」

上唇をちゅうちゅう♡と吸い、歯列をれろり♡と舐め上げて、僅かに開いた隙間から強引に舌を差しこむ。

ねっとり♡と口腔内を蛇のように這いずり回る舌の感覚に、頭の裏がぼうつと痺れていく。

「ん……う……♡ ちゅ……♡ はあ……♡ だ……めえ……♡」

「ホントはカイトやハルにもキミを近づけたくない。オレだけのモノにしたいって思ってた。だから、べったべたに甘えて、キミを独占しようとしたのに。それすら許されないっていうなら……もう……こうするしかない？」

ちゅぷ♡じゅるうう♡ちゅぽ♡ちゅぽ♡ちゅうううう♡♡

舌を絡め、強く強く吸い上げられる。

互いの唾液が混じり合って、口の中がぐじゅぐじゅにぬかるんでいく。

（奏くんとキスしてるっ♡ 口の中っ♡犯されてるみたいにネットリ舌で愛撫されてるっ♡）

こんなことをしてはいけない。

突き放さないと。

でも全身から力が抜けて、動けない。

れろおお♡ちゅぱちゅぱ♡ちゅうう♡♡

奏くんの舌は私の頬の裏を突き、舌尖でこねまわすように弄ぶ。

片手がブラウスに伸び、さわさわ♡と膨らみを撫でさすりはじめた。

「ふ……♡んうう……♡だ、だめえ……♡♡き、キスだけで、ゆるひ、てえ……♡」

「ちゅぱ……♡ちゅう……♡そんなトロトロの顔で言われても、説得力ないんですけど？
てか、キスだけでそんなエロい顔されたらオレが無理」

ちゅ、ちゅつと今度は下唇を食みながら、ブラウス越しに乳房を鷲づかみにする。

「っ、はあっ♡」

細い指が乳肉に食い込む感触で、じいんと下腹部が熱を孕んでしまう。

「おっぱい揉むくらいならいいでしょ？　ね？　ずっと我慢してきたんだから、これくら

いさせて」

「や……ああっ♡♡」

くりくり♡こりこり♡

くるくると乳輪をなぞり、乳首のさきつぽをぴんっ♡と弾かれて肩がびくん♡と上下する。
る。

（まだブラウス越しに触られてるだけなのにつ♡直に触られたらどうなっちゃうの♡♡）

「は……♡ふう……♡ん……う……♡」

自然と揺れる腰の動きに気づいた奏くんが、クスクスと密かな笑い声をたてる。

「あはっ♡おっぱいイジられて感じてるんだ？ 嬉しいな。もっといっぱい触ってあげるね」

私の返事を待たずに、奏くんは私のブラウスをたくしあげ、ブラをずり上げる。

ブラに押し込まれてた乳肉が、ぼるんっ♡と飛びだして勢い良く揺れた。

「え、おっぱい思ってたよりデッカ。ちゃんとサイズ合ったブラつけてる？」

「つけて……るよお……♡恥ずかしいから、そういうこと言わないでえ……♡」

「照れてるの？ かわい♡ はあ、マネージャーの生チチ、きめこまかくてしっとり吸い付いてきて、触り心地最高♡」

もにゅ♡もにゅ♡と奏くんの指先が乳肉に埋もれていく。

「ほら、乳首ピンピン♡に勃ってるし。こうやっておっぱい揉みながら乳首弄られるの、イイでしょ？ さっきより息荒くなってるよ？」

かりっ♡かりっ♡と指先で乳首を引っかかると、甘痒い疼きがさざなみのように身体の中に広がってゆく。

「はっひ♡んう♡乳首かりかりっ♡だめえ♡」

（マネージャーが……担当アイドルにおっぱい揉まれるなんてっ♡こんなのっ♡誰かに知

られたらっ♡絶対まずいよぉ♡)

「あーあ。担当アイドルに乳首イジられてだらしな顔してさー。こんなとこ、高藤に見つかつたらヤバイよね。あいつ、バチギレしてブツ倒れそう」

ふふつと微笑む彼の顔は、今まで見たこともないような妖艶さで。

あまりの色気に頭がクラクラしてくる。

まるで小悪魔だ。

綺麗すぎて、こんな時まで奏くんに見とれてしまいそうになる。

「奏……くん……。それ、冗談抜きであり得るから……。っ。それに、ここっ……。誰に聞かれるか、わかんないから……。っ。ほんと、やめて……。お願い……。」

「やだ。オレ、見つかつたつてどーでもいいもん。それより、マネージャーの乳首もつと可愛がつてあげる」

今度は奏くんの指先がぐに♡と乳首を強く押し込む。さらに爪先でこりこり♡とこね回すものだからたまらない。

(やだぁ♡乳首いじられるの♡きもちいっ♡乳首つてこんなに感じるとこだったんだ♡)ぐにぐに♡こりこり♡むにいっ♡♡

乳肉を強く搾られながら、固くしこった乳首を、指腹で摘まんでぐにいっ♡と引っ張られると、背中が反り返ってびくびくっ♡と腰がヒクついてしまう。

(こんなこと……♡今すぐやめなきゃ♡)

頭では警報がガンガン鳴り響いている。

なのに身体は与えられる快感に蕩かされてしまつて、抵抗出来ない。

そんな状態を見抜いているのか、奏くんがいたずらっぽく微笑む。

「マネージャーつて、思つてたよりエッチだね。絶対拒絶されると思つてたのに」

「そんな……ことお……♡」

「だつておっぱい揉まれただけで、腰めっちゃへこついてるじゃん。こっちも触つてほしいんじゃない？」

奏くんの手がタイトスカートをめくりあげ、太ももをストックング越しにつうつと撫でられる。

「やああ……♡」

「ほら、エッチな声出して。そんなの聞かされたら、もつと触りたくなっちゃうでしょ」

すりっ♡すりっ♡と奏くんの片手が私の股間を撫でさする。

おっぱいをもみもみ♡しながら器用にクリトリスの場所を探し当て、ショーツ越しに柔らかなぞりあげる。

「ひ……ん♡やだああ……♡ど、どこ触ってるのお……♡」

「どこって、クリトリスだけど？」

「そ、そういうことじゃなくて……んううう♡」

ゆっくりと指でクリトリスの輪郭をたどり、じんわりと根元に食い込ませてくる。

「や……め……て……♡奏、くん……♡」

奏くんのシャツをぎゅうつと握りしめて快感をやりすごそうとするけれど。

陰部とショーツが擦れて、淫らな熱がじわじわ♡と股間を這い上がってきて。

もつと触ってほしいと言わんばかりに、両足がぱっくり♡開いてしまう。

「あはっ♡腰突き出して、オレにそんなにクリ弄ってほしいんだ？」

「ちが……う……♡」

「違う。だっておまんこ、もうびっしりじゃん。イヤだったらこんなに濡れないでしょ？」

ぐりぐり♡と指でショーツを押し込んで、おまんこに食い込ませる。

（びちよびちよ♡のおまんこ汁でショーツがぐちよぐちよになってるう……♡ショーツ食い込んでっ♡余計おまんこ濡れてきちゃうよお♡）

「ほーら、クリ勃ってきた。パンツの上からでも分かっちゃうよ？」

さらに根元から勃たせるように指腹でこしっ♡こしっ♡とこね回して。

クリをきゅう♡と摘まんで、しこしこ♡と布越しに扱きあげてきて。

ぞくぞくっ♡とお腹の底から切ない疼きが這い上がってくる。

もう今すぐストッキングとショーツを脱ぎ捨てて、直接奏くんの指でぐちゃぐちゃにクリコキと指マンされてヨガリまくりたい。

でも、そんなこと絶対に言えないから、唇を噛みしめて淫らな声を封じ込めるしかない。

「く……ふう……んっ……は……っ……♡う……っ♡」

苦しげに震える私の顔をのぞき込み、奏くんが諭すように優しく語りかける。

「マネージャー、我慢しなくてもいいんだよ？ エロい声、いっぱい聞かせてよ」

私はぎゅつと唇を固く結び、ふるふると首を横に振った。

「外に聞こえ……ちゃうから……っ……♡」

彼の言うことならなんでも聞いてきたけれど。

これ以上は、越えてはいけない。

ギリギリで保っていた均衡が、全部壊れてしまうから。

「ふーん。聞かせてくれないんだ。じゃあ、もつとしちゃおうっ」と

奏くんが背後で、ジッパーを降ろす音が聞こえてきた。

そしてすぐに、私の太もの間にぬるっ♡と熱硬いモノが差しこまれる。

（あっ♡奏くんのおちんぼっ♡おまんこに当たってる♡すごいっ♡おつきくてあついっ♡）

おちんぼの感触だけでも、可愛い彼の顔と華奢な身体に似つかわしくない、長太極悪ちんぽであることがすぐに分かった。

「ストッキングゴキしちゃう。ね、ちゃんと挟んで？」

「ん……♡これ以上はダメ、だよお……♡」

「いつたらおしまいにするから、ね？」

甘えた声で囁かれると、腰砕けになってしまう。

「ほ、ほんとにこれで終わり……だからね？」

「うん。分かってる。せめてマネージャーのまんこの感触だけでも、味わいたいんだ」
私を抱きしめ、肩に口づける。

（そんないじらしいことを言われたら、拒絶なんて出来ないよ……）

内股に力を込めて、きゅっ♡とおちんぽを挟み込む。

すり……♡すりっ♡

「くっ♡んううくっ♡くう♡ふうううくっ♡♡」

愛蜜が漏れてぐっちより♡濡れたショーツとストッキングの上を、反り返った怒張が往復する。

刺激はさほど強くない。けれど、存分にクリトリスを弄られた後に与えられるそれは、私を発情させるには十分だった。

(ショーツがよじれてっ♡おまんこにぐいぐい食い込んでくるう……♡こんなのっ♡余計エッチな気分になっちゃうよおお……♡♡♡)

ストッキングとショーツを隔てていても、ムンムン♡の牡臭い熱とバキバキ♡に浮き上がった血管の感触がつぶさに感じられて。

次から次へじゅわっ♡とおまんこから蜜があふれ出しては、ショーツをベトベト♡に濡らしてゆく。

「すご、擦るとマン汁染み出てくる。オレのちんぼ、もうベトベトなんだけど？」

ぬちよ……♡ぬちよ……♡

股間に張りついたストッキングをペニスが擦るたびに、じんじん♡とおまんこが熱く痺れる。

(おちんぼでぐにぐに♡ショーツ揉み込んでくるう♡おまんこが美味しそうにショーツ食べちゃってるよお♡)

突っ張った足がぐくぐく♡震えて、立っているのもやつとの状態だ。

(お願い、早くイって……♡)

うつむき、ひたすら彼が達するのを願う。

ここで終われば、踏みとどまれる。

ただの戯れだと受け流して、なかったことに出来る。

（だから、だから——！）

「あゝ無理。やつばナマでイキたい」

ずりつとストッキングとショーツをずり降ろされ、ぬるっ♡と先走り液でぬらついた亀頭が、肉溝に滑り込んでくる。

「や……っ♡ ちょ、直接は……っ♡やめてえ……♡♡」

「やだ。オレがイクまでつきあってくれるんでしょ？ これ、オナニーだから。マネージヤーはただ、じつとしてればいいんだよ」

奏くんがゆっくりと腰を引くと、肉唇に挟み込んだ肉棒がぬるっ♡と滑って、粘膜を擦る。

時折、くりゅ♡くりゅ♡とクリトリスを根元からペニスに押し上げられて、きゅんきゅんとおまんこが疼いてしまう。

（やだぁ♡こんなの……っ♡おちんぼナカに挿れてほしくなっちゃうよ……♡♡）

「マネージャーのクリ、なんかデカくなってる？ やつば直接イジられると嬉しいんだ？」

「わ……かな……いよお……♡だめ……♡これ以上したら、もお……っ♡」

必死に耐えるけれど、腰は勝手にへこへこ♡と前後に揺れて、自らおちんぼを抜き上げようとする。

存分に弄られて蕩けたおまんこは、今すぐにでもおちんぽを迎え入れたくてうずうずしているのが分かる。

(だめ♡奏くんがイクまで我慢しなきゃ♡私が気持ち良くなっちゃ意味がないんだから……♡)

「すつご。ローション塗りたくったみたいにな、ぬるっぬる。ヤバ、これさあ、ちよつとこうやって押し込んだら……」

ぬるるううううう♡

「ひゃああつ♡だめっ♡おまんこのナカにつ♡入っちゃう♡」

「先っぽだけ？ ね？」

ドレツサーに手をつかされ、お尻を突き出した状態になる。

ぱっくり♡とお尻を割り開かれ、肉茎の先端がおまんこの入り口にびとり♡と押し当てられた。

ちゅく♡ちゅく♡

「ははっ。オレのちんぽとマネージャーのまんこ、キスしちやつてるね。ぬちやぬちやエロい音してる」

「は……♡んう♡あはあ……♡♡」

ぬちゅ♡ぬちゅ♡

指で押し広げられて剥き出しになった肉びらと肉傘が触れ合うと、むちゅっ♡と粘膜が吸い付いてそのままナカへ誘い入れようとする。

（奏くんのバキバキ♡勃起おちんぼがほしくて、おまんこ全体がヒクついてる♡でも我慢しなきゃ♡セックスしちゃったら、ほんとに……元に戻れなくなるっ♡）

ぬちっ♡ぬちっ♡

「……っ♡んう……♡」

カクつきそうになる腰の動きを必死に堪え、お尻に力を込める。

（このまま、奏くんが出してくれたら終わり……それまで、耐えなきゃ……♡）

「あゝやっぱ無理。もう挿れちゃうね」

ずぶぶうううう♡♡

存分に蕩けた淫唇は、いとも簡単に肉幹の侵入を許してしまった。

「……っ♡♡あああゝ♡♡」

（うそおお♡おまんこのナカっ♡ナマちんぽお♡入っちゃった♡どうしょお♡）

「あはっ♡マネージャーのまんこにナマハメしちゃった♡もう取り返しつかないねえ？」

（奏くんと♡ナマハメセックス♡どうしようっ♡マネージャーなのっ♡こんなやつ許されないっ♡）

「は……っ……♡すご……♡まんこメチャうねってる……♡マネージャーも、オレのちん

ぼほしくて仕方なかったんだね♡」

「……っ、あ……は……うあ……♡」

ドレッサー台にしがみつく私の腰を掴み、奏くんがぬるり♡とペニスを浅く抜き差しする。

さっきまで執拗に擦られていた蜜口は存分に蕩けて、ぬっぼり♡と絡みついては引きずり出される。

「ひ……♡」

（ナカっ♡引きずられてっ♡やつ♡これ好きっ♡）

「もうねっとり♡絡みついてきてオレのちんぽ好きすぎじゃない？ いっぱいハメてあげるから安心して」

ぬっぼ♡ぬっぼ♡ぬっぼ♡ぬっぼ♡

奏くんの腰が小刻みに揺れる。

おまんこの壁を絶え間なく擦られて、お尻が勝手にくねくね♡と動いてしまう。

（カリでぞりぞりされるのきもちいっ♡何もかもっ♡どうでもよくなっちゃうっ♡）

お腹の裏をぐりぐりゆ♡と抉られると、腰の周りを快感が取り巻いてびくん♡と揺れる。

いけないと分かっている、肉襞は欲望のままに肉茎をしゃぶり、貪り突くそうと蠢く。

(うそとお♡私♡こんなにいやらしい女だったなんて♡信じられない♡)

奏くんが背中から私の胸に手を伸ばし、手のひらに乳房を載せてたぶん♡と揺らし始めた。

「マネージャーのおっぱい、おつきくて綺麗な形で好き♡ね、このおっぱいって誰かに揉ませたことある？」

「な……んで♡そんな、事……聞くの……？ ん……うう……♡」

「オレ以外の男の痕跡、消しておきたいから。もちろん、おまんこからもね」

きゆう♡と赤く色づく乳首をつねられ「んっひ♡」と情けない声が漏れてしまう。

毅然とした態度で、彼をはね除けられない自分の弱さがつくづくイヤになる。

「ね、どうなの？ まさか処女？ だつたら嬉しいけど」

かり♡と耳たぶを噛まれてぞくぞく♡と背筋が波打つ。

「……だ、大学の時……ひとり、つきあってる人がいて……は、初めても、その、人……」

ぼそぼそと答えると、奏くんがふうーつと耳に息を吹きかけてきた。

「ひう♡」

「ぎーんねん。オレが初めてじゃないのかあ。でもいいや。これからずっと、オレがマネージャーのまんこを独占すればいいんだもんね♡」

38

[illegible]

ぞわぞわぞわっ♡と背筋を寒気に似た喜悦が這いのぼる。

(耳っ♡舌でれろれるのヤバいつ♡耳がおまんこになったみたい♡)

「マネーじゃ、耳弱いんだ？ かーわい。もつとしてあげるね」

じゅるじゅる♡ちゅぽ♡れろれろ♡じゅるうう♡

唾液を耳に塗りたくられて、舌先が耳穴をつつき回す

み込んだ肉棒をきゅうつ♡と食い締める。

からあああ♡♡」

うにしてやる」

ぐりゅっ♡ずぬるううう……♡♡

お腹の裏を擦っていた肉幹が、膣口ギリギリまで引き抜かれ――

どちゅん♡♡♡ずぶぶうううう♡♡♡

「ううっ♡ひうううううう♡♡♡」

おまんこの突き当たりをどちゅん♡と突き上げられ、思わず悲鳴じみた嬌声をあげてしまった。

（こ……れっ♡お腹の奥、きてるっ♡うそっ♡奏くんのおちんぽに♡お腹破られちゃうう♡♡♡）

奏くんが、私の腰を掴んで股間をたたき付け、どちゅっ♡どちゅっ♡と重たいピストンを私の子宮に喰らわせる。

「口でもまんこでも、マネージャーとキスしちゃったね♡もう、他の男となんてしちゃだめだよ？ もしそんなことしたら殺すから。マネージャーは全部オレのモノだよ♡ちっちやい子宮も、ぷっくり膨らんだクリも、乳輪デカめのおっぱいも、ゼーんぶオレが独り占めするんだから♡」

奏くんが私の背中に覆い被さり、甘えるように私にしがみつく。

ばちゅん♡ばちゅん♡と股間とお尻がぶつかり、どろどろに蕩け落ちそうな肉襞をぐっちゃぐちゃにかき回す。

「ああううっ♡ひぐっ♡おおっ♡おくう♡♡しよんなに突いたらっ♡らめええ♡壊れちゃうう♡」

「壊してやるよ。キミがオレ以外の男のちんぽハメられないように、ぐっちゃぐちゃにしてやるから……！」

ぐぼっ♡ぐぢゅぐぢゅ♡どちゅっ♡

柔らかくほぐれた子宮口をこじ開けるように、亀頭が秘奥を抉り込む。

ひしゃげた子宮口が押し上げられて、おへその裏にくつつきそうだ。

「ひぐううう♡♡もうらめええ♡ゆるひれ♡いぐ♡もおイっちゃうからああああ〜♡♡」

涙と涎でぐちゃぐちゃになった顔を歪めて懇願すると、奏くんが私をぎゅうう♡と抱きしめてかすれた声で囁く。

「……っ、イかせてあげる、から……っ♡オレのこと、好きって言って……」

「うあ……しゅき……っ♡奏くん、しゅきい……♡♡」

熱に浮かされるようにその言葉を口にしてしまう。

『好き』だなんてただの口からでまかせ。

ただ、彼を悲しませたくないだけ。

彼に、笑っていてほしいだけ。

そう自分に言いきかせる。

でないと、この行為に言い訳が出来ないから。

「……嬉しい♡じゃ、イカせてあげるね♡」

耳元に、蜂蜜のような甘い囁きが流し込まれる。

ぐぼっ♡どちゅどちゅ♡ぐぢゅうううう♡

抽送が一層激しくなり、子宮が潰れそうなくらいにごぢゅごぢゅと肉楔を突き込まれる。チカチカと目の前に星が飛び散って、深い絶頂が一気に身体のコを貫いた。

「っっ、おっっ♡♡♡いいいい、いっく……ううう♡♡♡」

どふううう♡どくどくっ♡ぶびゅうう♡♡♡

いなく肉棒から白濁が迸り、子宮にどぶどぶ♡と注ぎ込まれる。

「っ、は……っ。はあ……はあ……」

頬を紅潮させた奏くんが、はあはあと荒い息を吐きながら私の上へと倒れ込んだ。

「すげ……マナージャーのまんこ、気持ち良すぎ……」

びゅく♡びゅく♡と精液の残滓が胎内へ吐き出される。

頭がぼうつとして、夢を見ているみたいに霞んでいくけれど。

膣筒の中でしゃくりあげる肉棒の熱が、これは現実だと訴えているかのようだ。

（どうしよう……♡ほんとに、奏くんとしちゃった……）

「……ね、マナージャー。オレのおまんこペットになつてよ。そしたら、アイドルずっと続けてあげる」

耳元に奏くんの声が響く。

まるで悪魔のささやきだ。

——奏くんはきらきら光る私のスーパースター。

ステージでまばゆい光を放つ彼を、ずっと近くで見たい。

（そのためなら、私は——）

「……分かった……なるよ、おまんこペットに……」

「ふふ、ありがと。マネージャー。毎日ずこぼこ犯して、口にもおまんこにもいっぱいオレのザーメン、注ぎ込んであげるからね♡」

奏くんは目を細めて微笑み、汗ばんだ私の首筋に口づけた。

【続きは製品版でお楽しみください！】